



藝 人 譚

左 東 柳 水 編

桐竹紋十郎の談話 (二)

貴君方は御存知でせうが北越の雪と云つては實にお怖をしても嘘の様です、平地は一丈、少し町離れになりますと一丈五六尺も積つてあります、暖國の人に嘶するとべら樺め一丈五六尺も雪が積で人の往來がなるものと仰しやいます但其所は不思議です、雪が二尺なり三尺なり積りますと車や馬は到底役に立ちませんから橇といふものへ米なり薪なり何でも荷物を乗せて雪の上を曳くのです、デスカラ此橇に雪が固められ往來は鐵石の如く引締り加之も曳れるたんびに擦られるものですから一箇の鏡を敷詰たる如くピカ／＼光つて其の光ること塗橡の上を足袋で歩く様な類であります。我々不馴のものが下駄でも穿いて歩かふものなら三足と踏出さないう

ちに忽ち圖轉倒です。然し馴れたもので北國の人は老人こそずんべと稱へます藁靴を穿ますが、若い人達は面白想に下駄を穿て兩足を互違にしながら兩手を綱渡りの様に舵を取りツーツーと五六間宛に歩いて歩行します、夫で小供などは殊に雪下駄と云つて拍子木の先の削つた様なものへ竹か或は鐵の板を付けわざと迂る様にしてツカ／＼一間ばかり爪走で走り勢を付ては例の通りツーツーと巧いものは十間も迂つては遊ぶのです、デスカラ雪が一丈積もらうが二丈積もらうが其橇と人間の迂るんで固り／＼其堅きこと驚口でも立たない位です、然し夫は往來三四尺丈のことで其兩側はフワ／＼と迄は有りませんが柔かい雪です、恰好私共が三人所拂に遇ひ新潟を志して柏崎を出たのは舊曆十月二日ですから雪の盛中お負に其の日は土地のものが寒吹雪と稱へます大暴の時なんです、雪は降る／＼宛然綿をちぎつて散す様でおまけに風の爲に吹雪を起して疋巴と打廻り一間離るれば人影が見えせん位、勿論旅宿錢もなく追立られる始末ですから雪を防ぐ道具どころに着物さへ眞に肌を隠すといふだけイヤ寒い何のツて煩端なんぞは斷切に飛ぶ様です。恰好柏崎を離れて川舎には能くある土橋の邊まで行きますとサア野原になりましたから益々吹雪が烈しくなりまして見る／＼雪が二尺も往來の上に降積りました、平常ならば道の表だけはピカ／＼光つて居ますから其様なことはないのですが何様雪が積りまして

野も山も溝も河も田も畑も一面のノツペラポーになりました。お負に茲が土堤見た様になつて居ましたから踏外したものと見えます、其柔かい雪の上へ一ト足踏込むと身體の重みでズル／＼雪の中に吞れて仕舞ました、先に立つた私が此の通りだから連の二人も同じくアレツと云ふたが追付きません、底の邊まで落込んで上を見ると穴になつた頭の上に雪が七八尺もあります、聲を立て叫んだが井戸の中で物を云ふ様なものですから仕様がな計りか身動きさへならない譯で、其内に身體は冷たくなつて参りますしはいよ／＼いかんと覺悟をしました、然し其所は人間の慾で若しや助かるまいものでもないと探搔て見ますと自體柔かい雪ですから段々自由になります、是は占めたりと血氣に任せ頭を振廻して雪を押し／＼搔分るなど丸で土鼠です、夫でも運命があつたと見えまして何やら斯やら雪の上へ這上りましたが最う其頃は身體が凍えてツロ／＼痲痺て参りました、けれども一生懸命ですから走り／＼土橋の所まで参りますと此所に四五軒家があつて其内の一軒は内山勇太郎さんと云つて其頃の目明し今の特務ですな、此人は情深い人で、私共に所拂を云付けたのは此人ですが是れは代官所の命令だから仕方がない實に氣の毒だと慰めてくれた人でしたから茲へ駆け込むと其門口へ行つたまでは覺があります但ツタリ倒れて夫からは夢中でした、暫らくして氣が付きますと最う内へ抱き込まれたものと見へまして

爐の傍に私しばかりでない連の二人も運よく脱れて矢張り茲へ駆け込んだものか薬火に暖められて居りました、主人の勇太郎は留守だと云つて其母親の御婆さんが中々深切に介抱してくれます、臆て重湯なんぞを啜らせられましたので漸く人心地が付き其夜を其所で明し翌日になると主人が歸つて参りました、仔細を聞いた上で誠に氣の毒ではあるが所拂になつたものを目明の宅に置く事はならんからと云ふので無理に頼むといふ譯に行きません、さらばと云つて路用はなし、新潟へは懲て再びといふ勇氣がありませんから仕方のない儘大膽にも代官所へ駆け込みました、何うか飯が喰へませんから牢へ入れてくださいと願ひますと代官所では罪のないものを牢へ入れることは出来ぬと云ひます、けれども飯が喰へませんと死すから牢へ入れてくださいとお役人ともあらうものが見す／＼三人の死にますのを見殺にしますかと突掛りました、何時もならば役人に一ト言いはれると縮み上るのですがナアに殺されても、死ぬに二ツはないと云ふ氣組ですから驚きません、スルト役人も可愛想だと考へましたか夫ならば宿預をしやうと云つて前の笠島屋へ預けられました、昔は妙な事がありましたね、デスけれども迷惑なのは其笠島屋で上から預けられたと云つて旅宿賃が取れるのでなく去ればと云つて否だといふ譯にも行かないから泊て置く様なものゝ眞の命を繋ぐだけですから残り飯にお菜と云ては澤庵漬の三年古が二切位

です、骨離れがする様な氣で仕様がありませんから兎を買ふのです、大抵一羽は六百文位ですが元より金なんぞはあらう筈がありませんから各自に衣類を脱で買ふのですな、それも着て居るものを脱ぐのですから長く續く筈がありません、果は寝衣にも上羅にも襦袢一枚といふ有様になつて震ふて居ました、それでもどうやら冬を送り春を迎へ夏になりましたが方法が付きません、然し喰ては居るものゝ素より小遣が入りますから人足の手傳をしたり彼の小供のお玩具にする、ブリ／＼太鼓やドツコイ／＼の相撲等を拵へて居ましたが同所の浪華大夫や三味線彈は一座に離れても出来る藝を持て居るものですから時候が好くなりますと何所へか縁ぎに行つて私が獨りボツチになりましたからいよ／＼見込みが付きません、スルト恰好八月頃でした、或る懇意な宅へ遊に行てますと近在の稻田新田といふ村から田舎には能くある鎧守様の祭禮を賑かにしたいと云つててりは、狂言を買ひに來ましたが生憎ないと云つて困ると噺をして居た所へ行合せました、茲だと思ひまして人形芝居をお遣なさい。中々てりは、狂言なんぞの及ぶ所ではないと煽動上げとう／＼約束をして手金廿兩取りました、元より私獨りではあり肝腎の人形も衣裳もありませんから興行の出來様筈がありません、有様は金を取さへすれば逃るといふ考へでした、悪い事ではありますが、ナアニ大阪へ行きさへすれば返すと高を括つて掛りましたが向ふも廿兩

といふ大金を渡したのですから其人が些とも私の傍を離れません、デ初めに連中は聞かれました時卅人ばかり居ると大業に云つたものですから其村から卅疋程飾布團をした立派な馬を引張つて迎ひに來られたのには閉口しましたね、もう斯なれば絶體絶命ナアニ旅の恥は掻捨といふんで、いろ／＼古道具屋を探し内裏籬の首のない奴や金時が鉞りを振上げて人形や様々買集めまして足らないものは私が土をこねて間に合せ、それに小供の衣類を借集めて漸う人形が出來ましたが淨瑠璃がありません、スルト是も江戸から流れ込んで來た常盤津の師匠で何文字とか云ひました、女でこそあれ江戸ッ兒ですから氣象の面白いもので其様に困るなら同道に行くと云ふンデ三兩の約束で行つてくれる事になりました、けれども是で僅かに大夫が二人で、廿八疋の馬が餘る譯ですから平常懇意な人を頼み歩き漸々人數をまとめて何やら花々敷く稻田新田に乘込むことになりました。乗込みますと小屋の中には最う割るばかりの見物です、夫で村の口利といふ人が大夫元への積物が面白いです、大根二百本何右衛門より、牡丹餅三軍何兵衛より、焼豆腐と牛房の蒸詰一井何太郎より焼酎甘串何左衛門よりとした札を付けて其品物が山の様に積んであります、何様年に一度の祭禮、芝居なんぞは何十年に一度といふのですから太した賑かさで先づ御規則通り三番叟ですが、此方は何せ恥を掻くのだと思ひましたから取だけは取つて遣

れと口上を述べました、「諸此の三番叟といふものは稻の神を祭るもので是に白米一斗宛の御供物をすれば必ず豊年になります」と云や喝采沸くが如しで見ると白米一斗宛或は酒を付けてくるやら忽ち是も山の様に積上げました、實に田舎氣質の正直な處です、いよ／＼狂言に取り掛りましたが、一番目が白木屋で中幕が白石噺の揚屋、切が道成寺の所作事ですシタガ大夫と云つては私一人だからイヤ忙しいのなんのと云つて目の廻るばかり、一人を遣つて又外のへ移る時は仕様がありませんから二三尺切殺竹を舞臺の板の間に挟みまして夫へ人形を差して遣ふのです、加之も人形と云つても私の拵へた木偶で着付が借集めた小供の古着です、イヤ苦しいのなんのと云様のない所へ前に噺をした吉田才治が突然駈付けてくれました是は柏崎で困難のあまり娘を藝妓に賣り取返をしやうと云ふんで大阪へ人形や大夫を仕入に行き今柏崎へ歸つたばかりで私が此の有様を聞くや夫れは困るだらうと云ふんで駈付けてくれましたので此時は私が信夫で竹の先の宮城野を相手にして恰好白石噺の最中でした、夫れから勢を得て今度人形も衣裳も才治の持て來た本物で改めて道成寺を二人で遣りました、處が不思議の大喝采で賞の聲が絶間なしといふ有様でした、元より祭禮で一日限りの興行でしたが村の名主なんぞが是位の面白いものを柏崎で遣らないことはないと云ふんで、いろ／＼骨を折つてくれ金方になつて願出しましたが

袖の下の廻り様が宜かつたのでいよ／＼柏崎で表向興行を許され町外れの野へ小屋を設らへ例の冠代上座とした看板を上げたのは文久二年の八月十八日で古今の大入狂言が果物語です、處が慥か三日目です、私が土橋の與右衛門を遣つて居ます所へ目明が踏み込み突然私を取押へて貴様は豫て代官所より宿預になつて居るを何故無斷で興行をした不埒な奴だと云つて、上下を付けた儘小屋を引出し市中を引廻し同所と柿崎の堺で又所拂で追ひ立てられました、驚きましたね、舞臺に出て居る儘で文久一ツも持て居ませんから何うする事も出来ません、仕方がないから衣類上下を脱捨て乞食見た様な姿に變して大膽にも又々柏崎の小屋に逃歸り茲で今の桐竹紋十郎と改名をしたのです、是までは吉田辰五郎と云つて居ました夫で矢張り人形を遣つて居ましたが、名前は變ては居るし黒ン坊で遣つて居ますからツヒ解らずに仕舞ました、何しろ評判が好いものですから茲を打上げると新潟へ行き、渡り／＼て北海道の函館へ行きましたが、茲でも中々の人氣です、スルト御承知の長州さんで外國船を砲撃し其船が函館へ來たといふんで、同所では大騒動、十八歳以上の若いものは海岸を固める旅人を宿ることが出来んといふんで、興行もの所の噺ではありません。茲で又上つたりになりました飯の喰様がありませんから仕方なく穴堀大工になりました、コツ／＼遣んで兩手は豆だらけです、夫れで手間は幾許だと云ふと日に三

朱ですが雑用が一分掛りますからテンテ一朱足りないで何することも出来ません、仕方がありませんから、其厳しい中を船の底に隠れて津輕に渡りました、顯れると打首のものですな、夫れから又々新潟に歸つて遊んで居る中やうく金主が付きました私が座頭になり人形芝居を打て居りましたが越後に片貝といふ所があります、其所で矢張り例の看板を上げますと同所には嵯峨御所の出張りがありましたから忽ち召出されまして日本第一諸藝諸能の司冠上座といふ事に就いてお調べになりました、其所で役人に他所は知らず當所は斯く嵯峨御所の出張があるのに何故無斷で大業なる看板を上げた不埒な奴だと頭から極め付けられたが私は一向平氣でへいでも私は許可を得て居りますから、何所から許可を受けた定めて證據があらう夫れを見せろ、へいてんで豫て準備して居りました一軸の巻物人形芝居の由來を認めましたもので、私がいろ／＼苦心の末手に入つた秘藏のものを見せると、役人が甘く除口を拵へて置たな、見免せないこともあるが年に似合ぬ面白い奴だから咎めぬ、是からは毎日遊びに來いと云ふんで馬鹿に其役人と懇意になりました、自體此宮方の役人なんぞといふのは町方のノラクラ者が大小を差して威張りたさ半分に株を買てなるものが多くございますから諸馴れて見ると嘶の解つたもので何だへ紋十郎貴様は藝人だからいろ／＼其道のあらを知てるだらう一ツ當御所の役人になつて調べたらどう

だ、事に寄つたら飲料位は出るかも知れんと怪しからん役人があつたのですな、其頃私も年は若し夫れは妙だ面白いと云ふんで物好にも朱房の十手を預り大小を差して藝人あらしと出掛けました、先づ茶當り新潟を探しますとどえらい奴に逢ひました。(以下次號)

竹 本 氏 雀

本誌同人 岡 田 蝶 花 形

東神倉庫、支店長溝部、赤坂に啼き合さんと我れを招ける
(赤坂常盤にて)

折も折孟蘭盆なれや越駒をはじめ四方の女義誘ふ電話
昔知りし竹本氏雀現はれて我等の前に絃ひくうつゝな
その氏雀、今あまたるき聲失せて白山藝妓猿司と榮ゆる
かどなへて三十年やわれ溝部と聴きし氏雀は十八にして
氏雀てふ名を知る人は悉く五十路を過ぐてふ老を知らるゝ
思ひ出の昔話もしきり氏雀、彌雀と名も懐かしき
三井なる重役平井軌外はもわれらに加はり眞打ち妙技
われは御所、溝部太十、平井氏の源藏戻りは各々うれし
最後には昔の女義式、氏雀はも野崎觸りのめでたき打出し